

『歎異抄』第3条 ～悪人こそが救いのめあて～

■第3条について

5 梯 實圓『大きな字の歎異抄』181頁

この条は、「善人なほもつて往生をとぐ、いはんや悪人をや」という言葉をもつて、浄土真宗の奥義の一つである悪人正機（悪人を救済の正しき対象とする）について述べられた法語です。それは善を行じて、安らかな人生を生きるものよりも、悪を行じて、その罪に泣く弱く悲しいものにこそ、如来の大悲の心は

10 強く深くそそがれているという、大悲心の指向するところを知らせる教説であり、大悲の心が結ぶ焦点を示す言葉でした。…《中略》…

生きてあるかぎり煩惱の支配から抜け出すことのできない私どもは、どんな修行によっても生死の苦海を超えることはできません。それを憐れんで起こされた大悲の本願ですから、わが身の愚悪を慚愧しつつ本願力に身をゆだねた悪人こそ本願の御心にかなったものであると言い切っていかれたのです。

15

■「悪人正機」ということ

「悪人正機」という言葉の初出は、江戸時代に真宗大谷派の寿国が著した『歎異抄可笑記』（1740年）とされる。

20 「正」… まっすぐ、「傍」に対する語

「機」… 救いの対象

⇒「悪人こそが、阿弥陀如来の本願のまさしき救いの対象である」という意味。

善人正機・悪人傍機 ⇒ 世間の常識 … 自力の仏教

25 悪人正機・善人傍機 ⇒ 如来の慈悲 … 他力の仏教

善導大師『観経四帖疏』

しかるに諸仏の大悲は苦あるひとにおいてす、心ひとへに常没の衆生を愍念したまふ。ここをもつて勧めて浄土に帰せしむ。また水に溺れたる人のごときは、

30 すみやかにすべからくひとへに救ふべし、岸上のひと、なんぞ済ふを用いるをなさん。

⇒ 如来の慈悲は「苦あるひと」に向かう

「自力」とは、自らが修めた身・口・意（からだ・言葉・心）の善根によって

35 煩惱を鎮め、浄土へ往生しようとする。人間の積極的な行為や、努力そのものを「自力」というのではない。

まづ自力と申すことは、行者のおのおのの縁にしたがひて余の仏号を称念し、余の善根を修行してわが身をたのみ、わがはからひのころをもつて身・口・意のみだれごころをつくろひ、めでたうしなして浄土へ往生せんとおもふを自力と申すなり。（『親鸞聖人御消息』註釈版 746）

5

【ポイント】

- ① 法律的善悪、道徳的善悪、仏教的善悪、それぞれの意味の違い。
- ② 「悪人」とは一体、誰のことを指す言葉なのか。

10 ■ 仏教における善悪

諸悪莫作 衆善奉行 自浄其意 是諸仏教（「七仏通戒偈」）

もろもろの悪を作すことなかれ もろもろの善はつつしんでおこなえ

自らその意を浄くせよ これ諸仏の教えなり

⇒ 仏教の基本は廃悪修善

15

十悪・・・

① 殺生（生き物を殺す）・② 偷盗（盗み）・③ 邪淫（よこしまな性の交わり）・④ 妄語（うそいつわり）・⑤ 両舌（二枚舌）・⑥ 悪口（罵りの言葉）・⑦ 綺語（飾った言葉）・⑧ 貪欲（むさぼり）・⑨ 瞋恚（いかり）・⑩ 愚痴（おろかさ）

20

「善人」・・・廃悪修善の行によって自らの心を清らかにし、自他ともに安穏な境地へと向かっていくことが出来る人。

「悪人」・・・煩惱に振り回されて自らの心を清らかにすることが出来ず、自他ともに傷つけながら生きている人。

25

廃悪修善という基本的な仏教の道理からすると、悪人より善人の方が救われやすく、逆に悪人は救われにくいということになる。『歎異抄』第3条で、「しかるを世のひとつねにいわく、悪人なほ往生す。いかにいわんや善人をや」といわれているのは、その故である。

30

世間一般の価値観からすると、「悪人でさえ往生するのだから、まして善人はいうまでもない」と考えるのは当然のこと。だから善人が正機で、悪人が傍機と考えていくのが常識。しかし、阿弥陀仏の本願の救いは正機が逆転している。善人正機から悪人正機への転換は、完全に仏教の枠組みを変えてしまうことになり、「善人なおもって往生をとぐ。いわんや悪人をや」という言葉は、宗教的な思想改革をもたらす極めて重要な意味をもっている。

35

【悪人正機説に対する誤解】

悪人が救いの対象なら、積極的に悪を行って悪人になればよいのか？

⇒ 積極的な悪の是認ではない ※「造悪無碍」の異義

5 満井 秀城（本願寺派総合研究所元所長）、『いまこそ読みたい歎異抄』38頁



「悪人正機」とは、阿弥陀仏が私たちをご覧になって「凡夫・悪人をほっておけない」と立ち上がられた、阿弥陀仏のお心の上で語られた言葉だということです。その阿弥陀仏の側のお言葉を、私たち衆生が勝手に自分たちのほうに持ち替えるから、「悪人正機だから、どんな悪いことをしてもいい」という、とんでもない誤解になるのであって、その典型が「本願ぼこり」というあり方でした。

15 私たち凡夫・悪人のありさまをご覧になって、「この凡夫・悪人を何とかしたい」と悲泣された阿弥陀仏の叫びこそが「悪人正機」なのであり、阿弥陀仏を泣かせてきたことに気づいた私たちは、「だったらもっと泣かせてやろう」と思うのでしょうか。「もうこれ以上泣かせることはすまい」と自らが変わっていくのが、念仏者の「つつしみ」や「たしなみ」なのです。けっして、道徳的に「危なっかしい」わけではないし、「道徳」が、「～してはならない」と外から縛る
20 のに対し、「悪人正機」は、自らが内側から変わっていくことに強みがあります。

※『一念多念文意』（註釈版 693）

「凡夫」といふは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとへにあらはれたり。
25

「凡夫」というのは、わたしどもの身には無明煩惱が満ちみちており、欲望も多く、怒りや腹立ちやそねみやねたみの心ばかりが絶え間なく起り、まさに命が終ろうとするそのときまで、止まることもなく、消えることもなく、絶えることもないと、水火二河の譬えに示されている通りである。
30

⇒ 「悪人」とは誰か他人のことでも、法を犯したもののでもない。それは真実が何であるかを知らず、日々煩惱に振り回され、自他ともに傷つけあって生きている、この「私」のことであった。

35 しかるを世のひとつねにいはいく、「悪人なほ往生す、いかにいはんや善人をや」。この条、一旦そのいはれあるに似たれども、本願他力の意趣にそむけり。

「悪人でさえ救われるのだから、まして善人はいうまでもない」という世間の捉え方を、親鸞聖人は「本願他力のお心に反している」と言い切られる。それはなぜなのか？

5 **そのゆゑは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむころかけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のころをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。**

なぜなら、自力で修めた善によって往生しようとする人は、ひとすじに本願のはたらきを信じる心が欠けているから、阿弥陀仏の本願にかなっていないのです。しかしそのような人でも、自力にとらわれた心をあらためて、本願のはたらきにおまかせするなら、真実の浄土に往生することができるのです。

「自力作善のひと」は自分の力を信じているので、常に自分の力をたのみとし、往生成仏を目指そうとする人たちのことを意味していた。したがって、自力の行者は他力のはたらきにまかせることはなく、阿弥陀仏の本願他力の救いを必要としない人のことでもあった。だから『歎異抄』では「自力作善のひと」に対して、「阿弥陀仏の本願他力の救いのお心に反している」といわれる。

しかし自分の力を信じて修行している人も、自身の力の限界、自分の判断の曖昧さに気づき、自身にたよる心をひるがえして、如来の本願他力の救いに身をまかせるなら、善人は善人のまま、弥陀の真実報土に往生することができる

■第3条のまとめ

「悪人正機」の教えは、世間の善悪観や仏教の廃悪修善の枠組みを基準とするものではありません。阿弥陀如来の本願他力の救いは、「大悲の必然」としての救いであり、煩惱の淵に埋没して生きるこの私（悪人）に向けられたものでした。

もっとも自力作善の善人も、自力のころを捨てて、本願他力にまかせれば、如来の浄土へ往生できるといわれていますが、如来のお心の本意は、悪人であるこの私を、本願を信じ念仏申す者に育て上げ、浄土へと導いて仏とすることだったのです。

また「悪人正機」の教えは、悪人を好むというものでも、決して悪事を奨励するものでもありません。煩惱の淵から抜け出ることができず、日々、苦悩の中に生きる私の姿を如来は悲泣されています。その如来のお心を知られる時、私たちの意識の上に、従来 of 枠組みを超えた真実を仰ぐ新たな方向性と、真実を尊ぶ新しい価値観が立ち上がってくるのではないのでしょうか。